

「光に照らし出された勝利」(平成 28 年 1 月 17 日付 Facebook への
投稿原稿 NO.2 を一部手直したもの)

石井 徳男



P.P. オソーフスキー(1925-2015) ロシア芸術家同盟会員 ソ連人民芸術家

三幅対「光に照らし出された勝利」(制作 1980 年)

左の部「クリコヴォ平原のドミートリー・ドンスコイ」カートン・油彩 62 x 35 cm

中央部「金色にライトアップされたクレムリンの丘」カートン・油彩 63.5 x 72 cm

右の部「勝利の 5 月」カートン・油彩 62 x 35 cm

この作品は、作者から特別に分けて貰ったものである。特別にと言うのは、後述するように、最近になってそうであることを悟ったからである。二回目のモスクワ駐在期間(1998～2003年)中に一応脱稿をみた拙著「現代ロシア絵画考」の原稿の露訳を持参して、将来の日本での出版に備えて、書評を画伯にお願いすることになったのは、私にとって大変幸運な巡り合せからであったが(その経緯については、拙著または、現在公開中のホームページ URL: <http://www.ishii-gallery.com> を乞う参照)、その書評は、私の予想を遥かに超えた、最大限の賛辞と言えるようなものであった。

オソーフスキー画伯と言えば、現代ロシア画壇で大御所的な存在の、ロシアでは大変有名な画家であり、活躍中の画家の中で最も高い評価を受けている大家のひとりである。そのような彼から、過分なお褒めの言葉を頂戴してしまったからには、これは何かお礼をすべきではないかと考える一方で、失礼にならない範囲での、という微妙な問題を孕んだ難しい対応のようにも思えたので、画伯を紹介してくれた友達の画家にどうすべきか相談したところ、「石井の本を大変気に入って、彼が自分の思う通りの感想を述べてくれたのであるから、謝礼は要らない。それよりも、何か一点でも、石井が欲しいと思う彼の絵を買え

ば、喜んでくれるのではないか」という尤もと思えるような助言をしてくれた。

それで、画伯は、クレムリンを描いたことでも知られた画家であったので、彼のところに出向いて、「できればクレムリンの絵が欲しいと思っているのですが、何か一点絵を買わせて貰えないでしょうか」とお願いしたところ、この三幅対の作品を快く譲ってくれたのである。

この絵は、ご覧の通り、三幅で一つのテーマ、ロシア人の祖国を守る強い気概を表現した歴史画で、私の見るところ、やや小振りながら、画家の秀でた創作意図に裏付けされた、入魂の力作である。三幅対の左の部には十三世紀前半より二百五十年に亘り続いた「タタールのくびき（モンゴルのロシア支配）」の中で、増税に反旗を翻したモスクワ大公ドミートリー・ドンスコイが初めてモンゴル軍に大勝してモンゴル支配を脱するきっかけになったとされる、一三八〇年九月八日のクリコヴォ平原（モスクワの南、ネプリャドヴァ川がドン川に合流する付近に広がる平原）での終日の戦いが決着した後のその夕暮れの光景が表現され、また右の部はファシストの侵入をはね返し、最終的にベルリンに攻め入った時の、先の世界大戦終結直前の一九四五年五月の戦闘に勝利した兵士の喜びを描いている。作品は三幅共に明暗対比の構図であり、言うまでもなく、暗部は占領下の隷属の状態、ないしはその危機と闘う苦難の状況を表わし、明るい光はそれを脱しようとする強い気概とその精神力に導かれた勝利を表現している。この三幅対は写実主義の歴史画ではなく、心の目で情景を観照して描いたもの、つまり画家の心情を投影して写実的に描いたロマン主義の作品である。三幅対の左右の絵と中央部のそれとの関係について言えば、左右の命を賭けて戦う兵士の愛国心の中身（対象）が中央部のクレムリンの丘により象徴的に表現されている。モスクワ・クレムリンは彼らの祖国の象徴であり、それが暗闇の中で強い光でライトアップされているのは、危機に際して祖国を守る人々の気持ちの強さを表現すると同時に、その異様な明るさの中に美しさというよりも、どことなく厳粛な色の気配を感じるのは、左右の画面に描かれた、多くの壮絶な死と犠牲の上に死を賭してかろうじて獲得した勝利に呼応する、犠牲者への鎮魂の気持ちが込められているためであろう。

この作品は、実は、国立リャザン州美術館（在リャザン市、モスクワの南東約190km）に所蔵されている大作のエスキス（下絵）である。大作（制作1980年 画布・油彩）の方は、サイズが中央部 290 x 230 cm、左右各部 290 x 150 cm であり、表現描写も中央部、左右各部とも、当然のことながら、フォルムや構図に多少の差異があり、特にエスキスでは左の部は、隷属の度合いの強さを表現した創作意図からして、右の部に比べて暗部が強めになっているが、大作の方は、絵として重要な色彩バランスの観点から、恰も前景にもう一つ松明が照っているかのように右の部と同様の明るさに改められている。それゆえ、全体として色彩バランスがより際立ち、より完成度の高い作品になっている。

このエスキスを画伯から譲り受けたときは、それが画伯の代表作の一つである大作の下絵であることに加えて、クレムリンがロシアの人たちにとってどのような意味を持っているかを、より具体的に皮膚感覚で私が知ることのできた作品であっただけに、とりわけ嬉

しさが先立って、彼の好意をそれほど掘り下げて考えることもなかったのであるが、大変残念なことに、昨年八月に画伯は他界されてしまった。訃報を知ったのは、昨年の秋も深まる頃であった。

それがきっかけとなって、この三幅対を自宅の壁に掛け、毎日眺めている。例によって、絵とコミュニケーションしながら、絵を鑑賞していると、破格の対応をしてくれた画伯の気持ちが今更のように伝わってくる。彼は拙著の原稿を読んで、単にそれを気に入ってくれたばかりでなく、そこから将来私が何を目指すようになるかを含めて、私のことをよく見抜いてくれていたのである。画伯の大作のこのエスキスは、大変貴重なものであり、画伯にとっては手放すことのできないものであったにも拘わらず、額縁のないままの絵に、譲ると決まった後にわざわざ額縁をあつらえてくれた上、特別にという言葉は全く言わずに、拙著の序章で彼が述べてくれたように、「ロシアの芸術学者に（石井氏が著わしたのと）同じことをなし得る者がこれまでいなかった以上、その労に対しあらゆる面で彼を助けることが必要であろう」という言葉を早速、にこにこ笑って実行してくれた、その彼の気持ちが今になって身に染みる。なぜなら、私が長年努力を傾注しながら希求しているコレクションの一般公開の夢が実現すれば、私が思うに、三幅対の大作は、一般的なツアーの観光客としては滅多に行けないリャザン市の美術館に所蔵され、観る機会もなかなかないが、日本の石井コレクションにはそのエスキスがある。その上、それは画伯の創作意図がより明確に示されている点で、大作の成り立ちを理解する上でも第一級の資料である。それゆえ、このエスキスはその注目度の高さからして、日本でのロシア絵画の普及に弾みをつけてくれるに違いなく、画伯がそれを私に譲ってくれた特別な意味は、まさにその点にこそあったのであるから……。

そんな経緯もあり、三幅対になっているためうまく並べて展示し難いというただそれだけの理由で、これまで三点一緒に並べて眺めることのなかった大作三幅対のこのエスキスを、購入時のエピソードを交えながら画伯を偲び、改めて彼の気持ちに深い敬意と感謝の意を込めて、ご紹介する次第である。